
素直じゃない二人

紅炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直じゃない二人

【Zコード】

Z2062D

【作者名】

紅炎

【あらすじ】

良く言えば幼馴染。悪く言えば腐れ縁。そんな関係にある「く普通な高校生の信哉。思春期真っ只中な高校生の明。信哉はある日突然書き出した明の小説を読まされる事になった。一体明の真意は?そして小説に秘められた想いとは?

足に力を込める度、自転車のペダルはキイキイと悲鳴を上げる。ペダルが錆びついているせいだろう。手入れをしてないためか自転車はボロボロで、カゴは歪んでいるし、チェーンも錆びれきっている。チェーンが寂れているせいで、やたらとペダルが重く感じて仕がない。

「はあー……」

重いペダルを漕ぐ辛さに耐えかねて、思わず深い溜息を付いてしまった。そして僕は自転車から降り、スタンドを立てる。自転車がちゃんとスタンドで固定されている事を確認すると、僕は前を振り返つてみた。目の前には薄緑色の巨大な家が聳え立っている。

まあ、そこまで大きくないし、豪邸つてわけじゃないけれど、自分の家よりは断然大きいから、少し呆気にとられた。恐らく自分の家より一回りぐらい大きい。三角の形をした屋根は、冬に降り積もる雪対策だろう。この辺は冬になると、気温がぐっと下がり、雪がよく降るせいか、大雪事件がよく起きる。

大雪事件とは、屋根に積もった大量の雪の重さに耐えられず、家が潰れる事故の事だ。この家はその対策を施しているのだ。それでおそらく屋根が三角なのだろう。

そんな冬対策万全の家の前で、僕は立ち尽くしていた。木枯らしが吹き付け、寒さに身を震わせる。首に巻いている毛糸のマフラーが無ければどうなっているんだろう、と考えると恐ろしくて仕がない。

「いやいや。何、あれを返すだけだろ」

僕はそう呟くと、スタンドで辛うじて立つているボロ自転車のカゴに視線を移した。カゴには原稿用紙が軽く、数十枚は入っているであろうクリアケースだけあった。そのクリアケースに手を伸ばし、

それを掴み取る。空に悠々と浮かぶ太陽の光を受けて光り輝くクリアケースを開け、その中からその原稿用紙を全て取り出す。すると中は空になり、少し寂しい感じもある。

原稿用紙に目を移してみると、それは書道でも習っているのか？と思ひほど綺麗な文字で敷き詰められている。その原稿用紙を僕は数秒間眺めた。

「女の子の家に来るのが初めてだからって、一々緊張するな」

そう。これは悲しい事に事実である。僕は十七年間生きてきたが、恥ずかしい事に、女の子の家を訪れた事なんて一度も無い。だから、ほんの少し緊張する。しかし、相手が相手だから大分気が楽な気がした。

「そうだそうだ。相手は明なんだぞ。そんなに緊張する事無いじゃないか」

僕は下を向いたまま苦笑いする。そう、相手は明だ。別に緊張する事無いさ。

そう自分に言い聞かせた後、僕は後ろに振り返る。早くこれを返そう。そう思っていた。しかし、自分の目の前にいるものを見て、僕は思わず後退りしてしまった。

「め……明！」

酷く驚いた様子で僕は叫んだ。すると僕の目の前にいる黒髪の少女は微笑んだ。

「悪かつたわね信哉。相手が私で」

僕の目の前にいる少女 明はそう言い放つと、僕に怒りが湧き上がっている背を向け、薄緑色の家の中に帰ろうとする。僕は焦りながら明に言い聞かせた。

「ちょ、ちょっと待てよ。これ！」

僕は慌てて明に近寄り、自分が握っている原稿用紙を明に渡す。すると明は立ち止まり、僕の方に振り返り、まだ微かに剥れた表情で喋つた。

「……これ、面白かった？」

「へ？」

突然の問い掛けに僕は硬直した。不意打ちとはまさにこの事だろう。急にそう言われても、どう対応すれば良いのかが僕には全く分からなかつた。えと、こういう場合何て答えたらいいんだ？

「面白かつた？ 面白くなかった？ どちらか答えて」

明の表情がますます険しくなる。大きくて真剣な瞳が僕をじっと見つめる。その視線は、僕から逸らそうとはしなかつた。絶対に逸らさず、僕の返答を待つている。

よし。こういうのは自分が思つた事を正確に言つべきだよな

？

僕は少し顔を俯け、そして口を開けた。

「えと……微妙でした」

僕は恐る恐る自分の気持ちを正直に告げた。これで良いんだよな

？

自分の言つた事は間違つてないぞ。そう確信を持ち、僕は恐る恐る顔を上げた。すると、そこには 笑顔の彼女がいた。その笑顔を見て、僕は少しほつとする。いや、少し所じや無い。明の鉄腕パンチが飛んできなくて心のそこから安心していた。

「信哉。……ばかっ！」

「んあ？ な、何でばか呼ばわりされないと……。がはつ！」

僕の反論は呆氣無く彼女の鉄腕パンチに遮られた。満面の笑顔から放たれるパンチ。僕の頬を射抜く衝撃は半端じや無いもので、一瞬歯が抜けたような痛みが走る。

「め……明？ どうし……」

「もう！ 信哉のばか！ 少しは人の気持ちも考えて言つてよー。」

僕の言葉は怒り狂つた明の声にかき消された。何で本当の事を言つたのに、ばか呼ばわりされないといけないんだよ。

そう叫んでやろうとしたが、郵便受けの中に入つていた新聞紙で頭を叩かれたため、言うタイミングを失つてしまつた。ああもう、

何で凶暴な奴だろうか。

明とは良く言えば幼馴染で、悪く言えば腐れ縁という奴だ。お互の両親同士が仲の良かつたせいもあり、自然と話をしたりするようになつていた。まあ良くも悪くも、昔からの知り合いだった。昔は良く一緒に二人で遊んだりしていたもんで、毎日のように近くの公園に行つたりして遊んでいた。

今も遊んでいるわけじゃないが、一緒に登校したり、よく話をしたりもしている。多分、傍から見れば恋人同士までは行かずとも、仲の良い二人に見えるだろう。

それにもしても。それにしてもだ。最近、明の態度が酷いとしか言いようが無い。理由もなくいきなり僕をけなしだすし、命令口調だし。思春期真っ只中という事があるのかもしれないが、それでも酷すぎる。

そう、酷いんだ。明はとても酷いんだ。でも何故か。何故かだ。僕は明の事が気になつて仕方がない。取り合はず、幼い頃からの関係だつたから放つておく事が出来ないんだろう、と勝手に解釈している。

確かに明は可愛いだ。肩まである、つやのあるサラサラの黒髪。きめ細かい白い肌。ほつそりとした体型。潤んだ大きい瞳。そして左側の髪に結つている赤のリボン。それが非常に彼女には似合つていた。

男子生徒に明は可愛いと思いますかー？ みたいなアンケートをとつてみれば五十人中、四十人以上が可愛いと答えるはずさ。そう答えるつて自信持つて言える。けれど、僕は別に明を好きなわけじゃない……と思う。なのに、どうしてこんなに明の事が気になるんだろう？ 考えれば考えるほど分からなくなる。

「……あーつー もう、どうしてなんだよー。」
「ちょっと、どうしたの信哉？」

叫んだ直後に聞こえた明の声に驚き、僕は明の声がした方を見た。すると、僕の横には明がいた。一緒に同じ長椅子に腰掛けている。明は目を丸くして僕の方を見ていた。

「……あれ？」

僕は霸氣の無い声を出した。明はひどく驚いた様子で説明し始めた。

「の」

「まつたぐ。次の小説の話をしていたら、突然信哉叫び出すんだも

の」

「そうだったのか、とか言つて苦笑いして済ましたいところだが、

「そうは行かない理由があった。僕は周りを物珍しげな様子で見る。

「えと……ここはどこ？」

僕がそう呟くと、明は呆れた感じの表情を浮かべた。さつきから

「こうころ変わる明の表情は、何か新鮮な感じがした。

「……信哉、ここは公園よ。ほら、私達が子供の頃よく遊んだ」

「そう言われて僕はようやく納得した。古びたブランコなどの遊具の数々。紅葉で埋め尽くされた地面。葉が散り裸になつてしまい寂しくなつた木々。目の前で広がるこの光景が、非常に懐かしく感じる。すごい昔のはずの光景が、今もなお鮮明に蘇つてくる。

「……そういえばそうだよな」

「呆れた……」

僕が苦笑すると明も少し笑みを浮かべた。彼女の頬は秋の寒さのせいか、ほのかな朱を浮かべていた。そんな彼女の表情を見ていると、なんだか心が温かくなつてくる。どうつてこと無い事かもしれないけれど、僕には互いに笑い合えるこの一時が何よりも幸せに感じる。本当に何故かは分からぬのだけれど。

「それよりも、小説が何だつて？」

「ええ？ ホントに何も覚えてないの？ 私が書いた小説、また読んで感想聞かせてつて言つたのに」

そう言つて明は長椅子に置いてある数十枚に及ぶであろう原稿用紙を指さした。ああ、そういう事か。僕は心の中で、密かに納得し

ておく。

最近、何故か急に明はやたらと小説を書き出した。どれも数十枚で終わる短編物だ。しかも全てが恋愛系。こういう系は女友達に読んでもらつた方がマシだろ。そんな読後感がいつもある。男子にこんな小説を読ませる明も明だ。僕に感想聞かれても大体が微妙、で終わるのに。そして僕が毎回新聞紙で叩かれる。何で何でー、いつもほのかに涙を浮かべて問い合わせてくる。

でも、ここで断れないのが僕なんだ。何故か断れない。

「分かったよ。今日の晩にでも読んでみるさ」

そう言つて僕は簡単に引き受けた。ああ、僕のばか。人が良すぎだろう。僕が読んだつて明の為にもならないのに。

そう、分かってるんだ。分かってるんだけど……。

「ホント？ やつたあ！ ありがと信哉！」

こつ言つて明は笑うんだ。何時も何時も笑うんだ。畜生、可愛いすぎるんだってよ。こんな笑顔を前にして断れるわけ無いだろ？ そうだろ？

夜が訪れ、外は暗闇に包まれた。昼間まで聞こえていた工場の騒音も消え、静かに鳴く虫の声だけが聞こえる。

僕は自分の部屋にあるベッドに倒れ込んでいる。そして片手には朝方、明に渡された小説を持っている。今日中に見て、明日には明に返そう。今度は面つかつたつて言おうかな。そうすれば明、どんな表情を浮かべるんだろう。照れ隠しで僕をまた新聞紙でしばくのかな？

少し笑みを浮かべ、色々と考えを膨らませながら小説を読んでいたが、ふと僕の目はある数行に及ぶ文に釘付けになった。

「ここ……あの公園そつくりだな」

その文を見て僕はそう思った。光景が頭に浮かぶほど、よく描写されていた。昔の公園そのものを表すかのような文に僕は驚いた。

何もかもがあの公園にそつくりだつた。でもまあ明の事だ。アイデアに困り、仕方が無かつたから身近にあつたあの公園をモチーフにしたんだろう。

勝手にそう解釈し、僕はそのまま小説を読み進めた。全く明の思いなんて、読み取る事が出来ずに。

時間がどれだけ過ぎたのだろう。

僕は小説に夢中になつていたため、時間がどれだけ経過したのか分からなかつた。というより、時間の事なんて眼中に無い。手には、いつの間にか力が籠つていた。

僕の頭の中は、一刻も早くあいつの家に行かなきや。そういう考えだけで満ちていた。

「何だよ明の奴！ 言いたい事があるなら直接言えよー！」

僕はそう叫んだ後、ベッドから飛び起きた。時計を確認する。時間は十一時を過ぎようとしていた。

僕は深く気にもせず、薄着のまま家を飛び出した。背後から母親の叫ぶ声がする。でも、そんな事関係ない。

僕は夜空の下、アスファルトを駆け続けた。

何分間、夜道を駆け続けたかは分からない。

けれど今日はとても長い道のりに感じた。いつも五分ぐらいで着くはずの明の家が、やたらと遠く感じた。

やつとの思いで明の家に辿り着く事が出来た時には、もう町は完全に闇に沈んでおり、殆どの家の明りは消え失せていた。しかし、明の家の明りは付いていた。二階の、一部屋のみ付いている。カーテンの隙間から漏れ出る光を見ながら、僕は考えた。普通にインターホンを鳴らすのはいくらなんでも迷惑だ。出来る限り静かに、明だけを呼び出したい。

「仕方ない。可能性に賭けよー」

あの部屋が明の部屋でありますよー！」

僕はそう言つた後、少し気が引けたが、道路に転がっている小石を手に取り、軽くその部屋の窓を日掛けて投げつけた。それは見事に命中し、カタンと音を立てた。頼む、出て来てくれ！

秋野明は呆けた様子で、机の原稿用紙を見つめていた。入浴後らしいのか、彼女はピンク色の布地でたくさんの水玉模様で飾られた、可愛らしいパジャマ姿だった。彼女の長い髪は黄色のゴムで綺麗に束ねられており、朝方とは違つて何処かしら幼い雰囲気を感じさせる。そして彼女の周りをほのかなピーチのような甘い香りが漂つてゐる。

「はあ……」

明は深く長いため息を付いた。机にある原稿用紙はまだ空白だらけで、物語が書き込まれた様子は無い。鉛筆を持つ彼女の右腕は微動一つせず、小説を書く気は全くと言つていいほど感じられなかつた。

「信哉……小説を読んでくれたかなあ……」

明は先程からその事ばかりが気ばかりだつた。朝方彼に渡した小説。あれひとつに、全ての思いが書き募られていた。その思いを、彼は読み取ってくれるだろうか。または読み取つて貰えたのならば、どんな答えが返つてくるのだろうか。

そんな思考ばかりが彼女の脳内を螺旋を描いて回つてゐる。その度に自分の体温が上がつていいのが、心拍数が上昇するのが分かつた。この気持ちは興奮からなのか。それとも心配の表れなのだろうか。考えても仕方がないと分かつていても、考えるをやめる事が出来ない。どの道、自分の心臓がひどく揺れていのには変わりなかつた。

明はふと顔を上げ、ベッドにある時計を見る。時間は十一時十分を過ぎようとしていた。もうそろそろ寝よう。そして信哉のところへ行つてみよう。

椅子から立ち上がった瞬間

窓に何かが当たる音を察した。

僕ははめげずにもう一度石を投げようとした。何度もやってやる。あいつが気付くまでは、何度も。

僕の願いが通じたのか、カーテンが開き、窓が開き、そこから明は顔を出した。ピンクの布地で水玉模様が似合うパジャマ姿で、不覚にも可愛いと思つてしまつた。その上彼女の幼げな雰囲気を漂わせる髪型に、僕は見とれてしまつ。

「し、信哉？」

僕の姿を見て明は驚いた表情を浮かべて喋つた。まあ、誰でも驚くはずだろう。こんな時間に人の家に押しかける奴なんて滅多にいなはずだ。

明はちょっと待つて、と言い残し窓を閉め、カーテンを閉めた。

数秒後、玄関の施錠が外れた音がして、僕は明の家の玄関へと近寄る。僕が玄関の前に行くと、丁度玄関の扉は開いた。そしてその隙間からひょっこりと明は姿を出した。そして。

「ばか！ こんな時間に何来てるのよ！」

いきなり僕をけなした。いつも以上に怒つている明を見て僕は少し戸惑つた。何時もなら僕はここで身を引くが、今日はそういうわけには行かない。引くわけには行かなかつた。明の為にも、僕の為にも。

僕は空気を大きく吸い込み、そして口を開けた。

「ばか？ それはこっちの台詞だ！」

予想以上の僕の大きな声に明は少し怯んだ。何よ、と小さく言い返してくる。今が夜で、あんまり騒いではいけないと分かつてはいたが、どうにも気持ちを押さえる事が出来なかつた。僕はほんの少しだけ声を下げる、そして再び喋る。

「明！ 言いたい事があるなら口に出して言えよ！」

僕がそう叫ぶと、明の身体は敏感に反応した。明は明らかに目を

逸らした。戸惑った表情を浮かべる明は、僕から完全に目を逸らしていた。

ほんの少しの間、静寂が続いた。そしてその静寂を明の言葉が破つた。

「……気付いたんだ」

明は目を逸らしたままそう呟いた。何時も元気な明の表情は曇っていた。その表情に戸惑つたが、僕は明を見続けた。

「今までの小説も全部、それを伝えようとしてたんだろ」

僕がそう言うと、明は再び黙り込んだ。それでも僕は喋り続けた。彼女がどれだけ黙り込もうが、僕は決して喋るのを止めはしなかった。明の本心を確かめるために。

「どうして。どうして口に出して言つてくれ……」

「だつて！」

僕の声は呆氣無く明の声にかき消された。僕は少し怯んだが、それでも目を逸らさず、明を見続けた。彼女の頬が真っ赤に染まっている。寒さのせいだけじゃあ、きっと無い。何かが彼女の思いを揺らしている。そう僕は感じた。

そんな時、明の頬を一滴が流れ落ちたのを僕は見逃さなかつた。頬を流れ、それは落ちて、アスファルトを潤した。

「……だつて、言えないよ。直接信哉に……好きだなんて」

その時僕は、初めて明が弱音を吐いたのを見た気がした。頬を赤らめ、泣きながら弱音を吐く明を見た記憶なんて僕には無かつた。いつも強がつて、命令口調で、自分の望むように行かなければ拗ねて、そして暴力をふるつて。

そんな明の姿が僕の中では当たり前なのだと。泣く奴じや無いんだけど、気が付けばすでにそう僕の心には根付いていた。

そんな明が今本心を表し、自分の前で泣いている。顔を真っ赤にし、恥じらいを感じさせる表情は、僕の心を強く締め付けた。

そして、そんな彼女を見るたびに何故か胸が熱くなる。言葉で言
い表す事の出来ない、不思議な気持ち。

ただ、これだけは言える。

彼女の泣く姿を見たくない。いつものように笑つていて欲しい。
そして、また僕の名前をあの明るくて優しい声で言つて欲しい。
そんな思いが僕の胸の中で螺旋を描き、衝動に駆られるかのよう
に自然と僕の口は動いていた。

瞳を閉じ、頭を搔きながら僕は言つた。

「……あんな、そういう事は堂々と言つて貰いたいんだ。その方が
気分も良いし……嬉しいから」

僕はそう言つて微笑んだ。自分の中でも多分一番、笑えた瞬間だ
った。今まで笑えても本心から笑えた事なんて数えるほどしかない
だろう。

でも、その本心から笑えた瞬間よりも、今この笑顔の方が
何よりも良い笑顔だと宣言できる。

そんな僕の言葉を聞いて、明は呆気に取られた表情で僕を見る。
それと同時に明の瞳から再び雫が零れ落ちる。その雫は彼女の不安
と恥ずかしさ、何もかもが洗い落とした証拠だつた。

僕は先の事も何も考えず、ただ自分が感じた全てを声に出した。
どうなろうが関係無かつた。この気持ちだけは、どうしても伝えた
い。やつと気付く事の出来たこの思いを、明にどうしても伝えたか
つたから。

この思いがなるべく分かりやすいように。伝わりやすいようにと
思いながら言つた。

「僕は明の言う通り、どうしようもないばかなのかも知れない。だ
から自分の気持ちにも気付かなかつたんだ。……けれど、今なら分
かる。僕は

この先の言葉。それは僕と明だけしか知らない。

僕の気持ちがちゃんと伝わったのかは分からぬ。分からぬけ

れど、別にどうでも良いんだ。だつて今、こうして彼女は笑ってくれている。なんともいえない温もりが、僕の心を包んだ。

結果なんてどうでもいいんだ。全ては、そこに至るまでの積み重ねが、何よりも大切なんだ。それは明から教わった事だし、今身をもつて実感できた。

僕が今まで過ごしてきた毎日は、彼女と生きてきた毎日は、今この瞬間の為の全てだったんだと、心から思つ。

そして風が吹き、明の髪を揺らし、僕の髪を揺らして過ぎて行つた。

その時一瞬だけ。……一瞬だけ、アスファルトに強く咲き誇る花が、優しく微笑みかけてくれているように、祝福してくれているよう見えた。

了

(後書き)

初めて恋愛系を書きました。
盛り上がりに欠けるかもしれません、喜んでもらえたならば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2062d/>

素直じゃない二人

2010年10月8日11時43分発行